

2008 年度

博士論文（要旨）

（指導教員 山形和美教授）

ディケンズと悪

〈悪〉を照らし出す〈光〉に魅入られた人の物語

「悪への執着こそが、悪への意識的な下降こそが、
神への道の開示の可能性に直結する」

——山形和美

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

（博士後期課程）

学籍番号 106DC002 島田桂子

序章 本論文は、超自然的な悪の力を見据え、その問題と真剣に取り組んだ作家であるチャールズ・ディケンズの特徴に着目し、その悪がどのように描かれているのか、ディケンズにとっての悪とはどのようなものであったかを検証することによって、悪と対極にある善の問題を捉え、ディケンズの「キリスト教徒作家」としての芸術的真価を探ることを目的とする。

研究方法は、主に聖書との関係を土台として、小説の物語世界の構造、言葉、シンボル、メタファーを分析することを中心とするが、ディケンズのエッセイ、書簡、スピーチに表現されている思想や、作家としての人生の歩みや体験などの伝記的事柄、時代背景も扱う。全体の構想の流れは、前期～中期～後期と作品の時代を追いながら、悪の問題がどのように発展、変化をしているか、それによってキリスト教徒作家としてどのような成長をとげているかを見ていく。

第1章「チャールズ・ディケンズ——アンビヴァレントな人間像」では、ディケンズの宗教的背景と、作品を通じて見られる悪に対するオブセッションについて検証する。宗教的背景については、まず、作品中に描かれている教会、聖職者、信徒の姿を見ていき、ディケンズの目に映った当時のイギリス社会におけるキリスト教会と、それに対するディケンズの反応について触れる。さらに、子供時代から晩年にかけてのディケンズの信仰遍歴をたどり、最後は、唯一直接的にキリスト教を扱った作品である『主イエスの生涯』を分析することによって、ディケンズの聖書解釈について考察する。

続いて、ディケンズが悪に対するオブセッションについて述べるが、ここでは、まず、作品における悪の描写の特徴（弱者に対する暴力、凶悪犯罪者と社会悪、悪魔たちの姿など）を概観し、さらに恐怖と悪に関連する作家の子供時代の体験を見ながら、作家ディケンズにとっての悪について考える。最後に、『オリヴァー・トゥイスト』から、サイクスのナンシー殺害場面を取り上げ、ディケンズ作品における悪の解釈の意義について考える。

第2章から、具体的な作品分析に入る。**第2章「善と悪の対立」**では、初期の作品『ピクウィック・クラブ』(*Pickwick Papers*)、『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*)、『骨董屋』(*the Old Curiosity Shop*)を取り上げ、これら前期作品の特徴となっている「善と悪との対立」というテーマを描くディケンズ独特の神話的物語世界を研究する。第1作目である

『ピクウィック・クラブ』は、それまでジャーナリスティックなスケッチ風の短編を書いていたディケンズが、小説家へと変貌していく過程が見られる作品である。この作品分析では、その成長の変化の転換点を、ピクウィックなるものの真実を理解していく過程と見て、ピクウィックという〈聖なる愚か者〉に隠されている、愚かさと賢さについての逆説的真理について検証する。次に続く『オリヴァー・トゥイスト』では、この作品世界を覆う社会悪を超えた超自然的悪について検証し、グレアム・グリーンが「神のいない世界」であると見たことの真意を探ることによって、ディケンズの悪の問題と意味を考える。この章の最後は、善と悪との対照がもっとも顕著に表れている『骨董屋』を分析する。ネルとクウィルプに擬人化された天使と悪魔の住む超自然的な世界を見ながら、ディケンズによる悪魔の撃退法を検証する。

第3章「ヴィクトリア朝のバビロン」では、ディケンズの作品群を前期と後期に分ける、その分岐点に位置する大作『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*)を取り上げる。ここでは、前期作品に特徴的であった神話的世界と、後期作品におけるリアリティーが融合する中で、ロンドンを「ヴィクトリア朝のバビロン」と位置付け、そこに人間の墮落を象徴しながら、悪の問題を人間の罪の問題との関係において捉えていることを検証する。まず、作品の背景として、作品の伝記的要素と、小説家としての語り手が果たす役割について触れ、登場人物としての「私」ではなく、この作品それ自体が、語り手である小説家の力量と信仰を表していることを確認する。次に、ステアフォースに対する未熟な崇拜からアグネスへの成熟した愛へと成長していくデイヴィッドの物語を、バビロンから真の故郷であるエルサレムを目指す信仰的鍛練の旅として、物語解釈を試みる。

続く**第4章**は、「**ディケンズによる罪と罰**」と題して、中期後半の作品である『荒涼館』(*Bleak House*)と、『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*)を取り上げる。ここでは、大きな社会問題を背景として、そこに見られる罪の問題と悪の裁きの問題について考える。作家活動の後半に入って、ディケンズの作品はリアリティーを増し、神話的要素が薄れていく。そして、物語の構造と言語に「全世界の神による支配」という意識が織り込まれていることを見ていく。『荒涼館』では、まず作品世界の時間と空間について考え、大法官裁判所の係争事件の物語が、創世記で始まり黙示録へ至る壮大な聖書の時間の中で語られているこ

とを確認し、次に、この物語の1人称と3人称の二つの語り注目しながら、3人称の語り手によるデッドロック夫人の物語を死へ至る罪と罰の物語として捉え、1人称の語り手によるエスターの物語を生へ至る罪と赦しの物語として読むことを試みる。最後に、物語を聖書の空間に当てはめ、大法官に象徴される悪の死を、最後の審判として解釈する。次に扱う『リトル・ドリット』は、前作で扱われていた〈神の裁き〉の問題をさらに深め〈人間の罪〉の問題に取り組んでいること見ていく。まず、この作品が書かれた時代の社会的背景とディケンズ自身の当時の生活に触れ、この作品に影響したペシミズムについて考える。作品分析は、まず作品冒頭の〈光〉が裁きを示していることを見、後にこの〈光〉が赦しへと変わっていくことを見る。さらに、監獄に象徴される人間の罪と、放浪者カインとなった主人公アーサーの罪意識について考える。最後に、罪の告白と赦しによる悪の死という出来事と、アーサーの罪意識からの解放という出来事には、キリストの十字架の贖いによる神と人間との和解が示されていることを検証する。

第5章「回心と赦しへの希望」では、後期作品の中から、『二都物語』(*A Tale of Two Cities*)と『われらの共通の友』(*Our Mutual Friend*)を取り上げ、贖いによる死からの救い、復活といった中心的テーマを検証する。『リトル・ドリット』において、キリストの十字架による贖いは、エイミーによる愛と赦しに示されていたが、『二都物語』では、贖いのテーマは自己犠牲という究極の愛に描かれる。フランス革命を舞台としたこの作品を混沌とした現代の世界を象徴する神話として読み、パリとロンドンという墮落の都と、シドニー・カートンの幻に現れる新しい救いの都を、二都として捉えていく。さらに、作品に繰り返される復活のテーマについて見ていき、クリスマスに始まり復活に終わる物語構造に着目し、シドニー・カートンの自己犠牲の死と復活の意味を『クリスマス・キャロル』との関連において検証する。ディケンズの最後の完成作品である『我らの共通の友』は、前作の復活のテーマをさらに発展させている。まず、この発展に重要な役割を果たしている、人間の死と再生を描くために用いられた、バプテスマというメタファーについて考察する。そして、ジョン・ハーマン、ベラ・ウィルファー、ユーージーン・レイバーンという3人の登場人物の死から新しい命へと救われていく再生物語に、ディケンズの終末論解釈が表されていることを検証していく。

結論 ディケンズの作品には聖書の文学的側面、すなわち、聖書のシンボルや隠喩、構成などが反映されているだけでなく、聖書の語るメッセージ——この世界の創造と終末、人間の墮落と贖い主による救済、神の支配による勝利——が彼の作品のテーマと構造を形作っている。心理描写中心のリアリズムに重点を置いた解釈だけでは、ディケンズ文学における形而上学的な側面は、見落とされてしまう危険性があるのである。

また、理想と希望の実現の場として、ディケンズが徹底的に「この現実世界」にこだわったのは、宗教において、霊を sacrament において可視化しようと望むように、彼がその小説の中で、精神的、宗教的リアリティーをこの世の現実的な事柄、とくに家庭的な事柄に可視化させようとしていたことの表れである。ディケンズの小説は、この世の不確実性と悲しみの中で、神と会うこと、天国を見ることを望み求める物語であり、ディケンズにとって〈悪〉は、人間を「天国」という帰るべき故郷から引き戻そうとする圧倒的な力を持つ敵であったと言える。多くの社会悪を風刺し、当時の誰よりも強くそれらを糾弾したが、彼がその作品世界で扱った〈悪〉は、個別の社会的弊害や、個々の犯罪をはるかに超える超自然的、形而上学的な〈悪〉であった。

初期の作品においては、〈善〉と〈悪〉が対立する寓話的世界の中で、超自然的な人物として擬人化された〈悪〉を描き、それらの人物を徹底して真っ黒に描くことによって、それに対極する〈善〉の眩い〈光〉を想起させた。超自然的な悪を擬人化させる手法は、後期の作品においても見られるが、前期に見られるような単純な二元対立ではなく、〈悪〉が人間の〈罪〉との深い関わり合いの中で描かれるようになる。そして、ディケンズの形而上学的な〈悪〉と〈罪〉に対する理解が、作品構造をより精密に、より複雑なものとし、文学作品としての芸術的側面の成長に大きな役割を果たしていることが分かる。このようにして見ると、人道的な社会改革者としてのディケンズを支える信仰だけでなく、芸術家としてのディケンズを支える信仰があったことを窺い知ることができるのである。

ディケンズは、〈悪〉を照らしだす〈光〉に魅入られた作家であった。彼は、〈悪〉への意識的下降を通して、その深淵を暴きだす〈光〉を指し示し、死すべきものとしての有限性を越えたところにあるもの、時空の限界を越えた領域を覗きみることを、我々読者に可能にしてくれているのである。それが、「キリスト教徒作家」がなすべき達成だとすれば、ディケンズは間違いなく、偉大なキリスト教徒作家であると言える。

聖学院大学大学院
アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科
(博士後期課程)

学籍番号 106DC002 島田桂子